上越教育大学研究紀要　第24巻　第1号　平成16年9月
Bull. Joetsu Univ. Educ., Vol. 24, No. 1, Sep. 2004

キャンパスの人間形成機能からみた現代の学生生活
―― 上越教育大学と関西私立大学・短大の調査結果から ――

大　前　敦　巳*

(平成16年4月30日受付；平成16年6月30日受理)

要　　旨

本稿は，大学のマス・ユニバーサル化によって混迷状況にある人間形成機能に焦点を当てて，地方国立の上越教育大学と関西私立大学・短大で実施した質問紙調査の結果に基づき，今日の学生生活を通じた文化習得様式の特色を解明することを試みる。第一に，各大学・短大の特性を概観した上で，学生生活にどのような地域差が見られるかを明らかにする。第二に，そこから学生たちがいかなる文化実践や価値意識を身につけていくのかに着目し，各大学・短大における文化習得様式の違いについて分析と考察を行う。上越教育大学では学内クラブ・サークル活動を中心とする大プレート型，関西私立大学・短大では学生自身の興味関心にしたがって多元的な文化実践を営む小プレート型のライフスタイルが特徴として析出された。いずれのスタイルにおいても，「必要性への距離」の今日的意義を見直すことが課題に挙げられる。

KEY WORDS

student life	学生生活
function of human development	人間形成機能
modes of acquisition of culture	文化習得様式
distance from necessity	必要性への距離

1．はじめに

旧制高校を母体とする教養主義の崩壊とともに(竹内，2003)，大学のマス化，ユニバーサル化への変貌を伴って，キャンパスライフを通じたトータルな人間形成機能について論じられる機会はきわめて少なくなった（天野，2002)。1991年の大学審議会答申「大学教育の改善について」を受けた大学設置基準の「大綱化」以来，周知のように一般教育科目と専門教育科目の区分が廃止され，各大学の裁量による教育改革が急速に進んでいったが，それは審議会の意図とは異なり，アメリカ的なリベラル・アーツ教育の出現ではなく，学部教育の専門教育による支配が強まる結果をもたらすことになった(天野，1999，p.193)。他方，1990年代以降の経済不況に伴う就職難も重なって，各種資格の取得や就労体験のインターンシップが盛んになり，専門職大学院の人気が高まるなど，現実的な将来を見据えた職業専門志向が大学教育においても強まる傾向にある。

もちろん大学に求められる役割は，専門的な知識や技能の伝達だけではない。1997年大学審

*　生徒指導総合講座

議会答申「高等教育の一層の改善について」において，職業専門教育に傾斜したカリキュラム改革の反省を含めて，幅広い教養と豊かな人間性を涵養するために，教養教育と専門教育との有機的な連携に配慮した一貫教育の重要性を改めて強調している。1998年答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について」では，「主体的に変化に対応し，自らの将来の課題を探求し，その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力」である「課題探求能力」の育成が目標に掲げられた。さらに，「学部段階の専門教育においては，細分化した狭い分野に限定された知識やそれまでの学問研究の成果を単にそのまま知識として教えることに終始するのではなく，基礎・基本を重視しつつ，関連諸科学との関係，学問と個人の人生及び社会との関係を教えることなどを通じて，学生が主体的に課題を探求し解決するための基礎となる能力を育成するよう配慮し工夫することが必要である」として，専門教育の見直しを求めるに至っている。

しかしながら，現在なされている多くの議論は，教育課程面における科目編成や履修指導，さらには授業評価やFDといった制度・組織改善に関わるものが中心であり，学生のキャンパスライフ全体を通じた人間形成および社会化の観点から問題が論じられることはあまりない。大学審議会答申においても，正課教育外の学生生活に関わる提言は，就職指導，学生相談，サークル活動の施設・設備整備など，きわめて限られた範囲のものにとどまっている。主に1980年代までのカレッジ・インパクト研究のレビューを行った山内(1993)は，高等教育の社会化機能に着目した数少ない研究領域として評価しつつも，理論的フレームが未確立であったために方法論的な困難を抱えており，抜本的に研究構想の転換を図ることを提起しているが，現在においてもおよそ同様の問題を有していると言えるだろう。

最近では，「大学生活」や「大学生」を主題とする新しい研究が出てきているのも確かである。社会学的な観点からは武内編(1999，2003)が，大規模な質問紙調査とインタビュー調査を通じて，今日の大学教育や学生支援の方策を考えるにあたり，学生たちが主体的に形成した学生文化の実態を把握する重要性を指摘している。また，青年心理学の立場から溝上編(2002)，溝上(2004)は，大学が学歴トラックによる上昇移動のチャンネルになると言えなくなった中で，大学生の自己の在り方や生き方が変化してきた様子を明らかにしている。エリクソンのアイデンティティ論に基づいて，より高い社会階層に向かう大人社会を準拠とする「アウトサイド・イン」から，自己世界から出発してやりたいことを探す「インサイド・アウト」への転換が起こっており，様々な不安を抱きながら勉強重視の生活を送る学生の状況が析出されている。

レジャーランドと揶揄されて久しい今日の大学において，学生の自主性・主体性に根ざしたキャンパスの人間形成機能はもはや期待されていないと見られる向きもある。しかし，大学環境をめぐる構造的な変化と，各大学で次々と改編されてきたカリキュラムが，学生生活にどのような影響をもたらしているのか，また従来の大学が保持してきたキャンパス文化の在り方といかなる関係にあるのかを，あらためて議論の俎上に乗せてみる必要があると考える。本稿では，地方国立の上越教育大学と，関西の大都市私立大学・短期大学で実施した質問紙調査の結果に基づいて，各大学・短大における文化習得様式の特色を明らかにし，現代の学生生活の人間形成面における問題点と課題を提示することにしたい。

2．調査の概要

本稿で取り上げる調査の対象は，入試選抜上のヒエラルキーの頂点に立つ大学でなければ，しばしばメディアで紹介されるように華やかなキャンパス文化の先端を担う大学でもなく，今日ごく一般的に存在すると考えられる大学・短期大学の学生である。国立大学については，戦後「一県一大学」の基本方針のもとに広く地方に分散する形で設置され，教育の機会均等と地域文化の振興に寄与してきた経緯を考慮して，地方国立の上越教育大学を対象校にすることにした。私立大学については，人口の多い大都市部に集中して立地する傾向がみられることから，関西の市街地にある私立大学１校と，併設の短期大学１校に調査のご協力をいただいた。いずれの大学とも，古い歴史をもつ伝統校ではなく，比較的新しい時期に設立された大学である点で共通している。言い換えれば，過去の伝統や慣わしにあまり拘束されることなく，現代のニーズに応じた先駆的な教育実践を生み出すことを特色とする，教育・福祉・人文系の学部・学科・専攻をもつ大学である。

いずれの大学・短大とも，１年次生を対象とする悉皆調査で，2003年10月に「大学・短大生の生活と文化についての調査　2003年」と題して，①大学・短大での生活状況，②文化接触状況，③社会参加と価値意識，④過去の学習経験と学生生活条件に関する質問紙調査を実施した。今後，毎年同じ学生を対象にパネル継続調査を実施していく予定で，今回は第１回の基準年となる結果を報告する。それぞれの調査対象校における在籍者数，有効回答数，回収率は，表１の通りである。

表１「大学・短大生の生活と文化についての調査　2003年」サンプル構成一覧

大学・短大名	１年次在籍者数	有効回答数	回収率
上越教育大学	168	106	63.1%
関西私立大学	325	202	62.2%
関西私立短期大学	179	166	92.7%

学部・学科・専攻構成は，上越教育大学は学校教育学部，関西私立大学は人間環境学科（67名）と社会福祉学科（132名），関西私立短大は初等教育専攻（62名）と幼児教育専攻（104名）である。性別は，上越教育大学は男性34名（32.4%），女性71名（67.6%），関西私立大学は男性115名（57.8%），女性84名（42.2%）であり，関西私立短大は全員が女性である。

以下の分析では，第一に，各大学・短大の特性を概観した上で，学生生活にどのような地域差が見られるかを明らかにする。第二に，そこから学生たちがいかなる文化実践や価値意識を身につけていくのかに着目し，各大学・短大に表れる文化習得様式の違いについての分析と考察を企てる。

3．学生生活の地域差をめぐる現状

学生の出身地域については，高校卒業時の居住地を質問している。図１～３は，各大学・短

大の結果を県別の棒グラフに表したものである。上越教育大学では，地元の新潟県に居住していた者が21名（20%）と最も多いが，他の都道府県からも広範に学生を集めている。長野，石川，福井，富山の北陸信越地域をはじめ，東北，関東，東海を中心とする多くの県外出身者が在籍している。

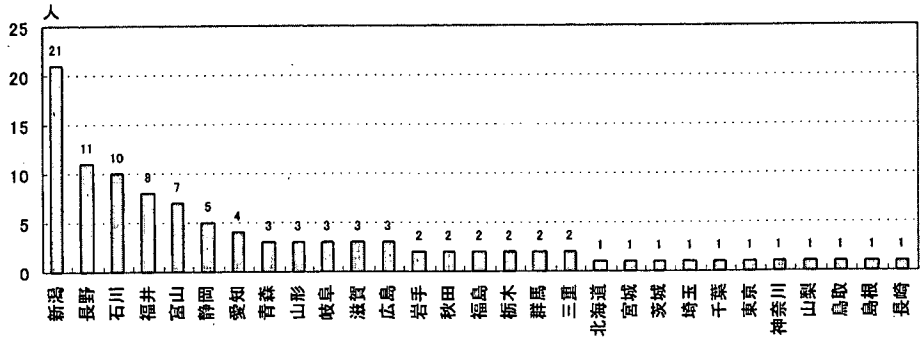

図１　高校卒業時の居住地（上越教育大学）

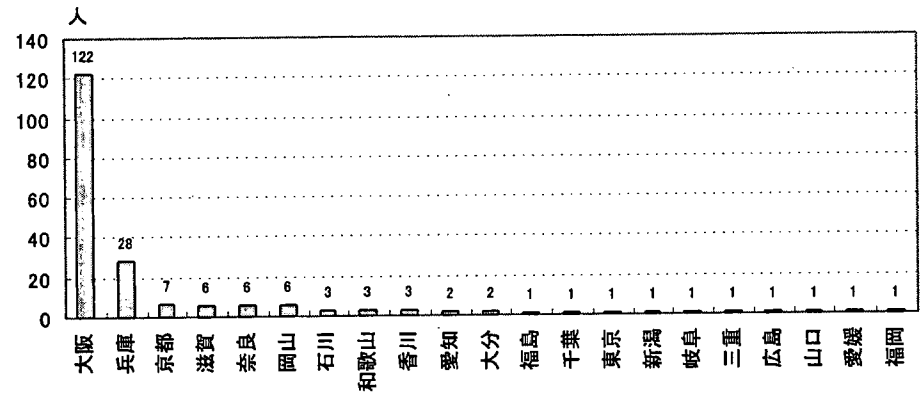

図２　高校卒業時の居住地（関西私立大学）

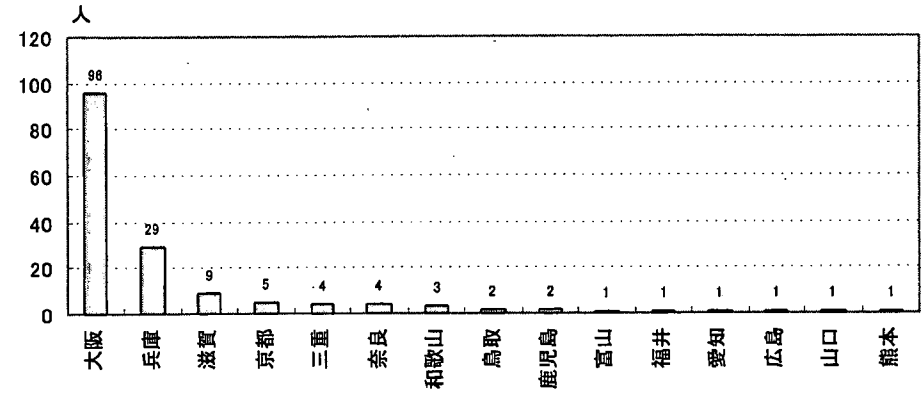

図３　高校卒業時の居住地（関西私立短大）

関西私立大学では，地元の大阪府に居住していた者が122名（62%）と半数以上を占め，他府県においても兵庫，京都，滋賀，奈良などの近畿圏から大部分の学生を集めており，都市部の出身者が多い。関西私立短大においても，大阪府に居住していた者が96名（60%）を占め，続いて近畿圏の兵庫，滋賀，京都，三重，奈良，和歌山の順になっており，同様に都市部を中心とする学生が多く集まっている。

学生の出身地域の違いは，居住形態の違いに密接に結びついている。地方出身の学生を広範に集めている上越教育大学では，76%が「大学・短大の住居施設・寮」で生活を送っており，続いて「賃貸アパート・マンション」19%，「父母の家（自宅）」3%，その他（下宿・親戚の家など）2%となっている。9割を超える大部分の学生が，親元を離れて大学近辺に居住し，学生仲間との集団生活を送っている。それに対して，関西私立大学では，「父母の家（自宅）」が80%で最も多く，「賃貸アパート・マンション」17%，「大学・短大の住居施設・寮」2%，その他2%と続く。関西私立短大でも，「父母の家（自宅）」が77%，「賃貸アパート・マンション」11%，「大学・短大の住居施設・寮」8%，その他4%であり，大都市近辺の実家から通う自宅生の比率が高い。

このことはさらに，ふだん買い物などの移動をする時の交通手段とも関係している。上越教育大学では，自転車を移動に用いる者が68%と最も多い。また，1年生ながら自動車で移動する者も24%と高い。関西私立大学においても，自転車を移動手段にしている者が41%と最も多いが，続いて電車・バス（32%）が多く，バイク・オートバイを用いている者が13%である。関西私立短大になると，電車・バスを通常利用している者が52%で最も多くなる。続いて，自転車（30%），バイク・オートバイ（9%）の順になる。

また，ふだんの友人とのつきあい方においても，上越教育大学では「直接会って話しをする」と答えるのが78%に達する一方，関西私立大学，短大になるほどその比率は低下し，関西私立短大では55%が「電話やメールでやりとりする」と答えている（図4）。別の質問では，大部分の上越教育大学生（94%）が「学内の友人を中心につきあう」と答えるのに対し，その比率は関西私立大学（61%）・短大（56%）で低下し，「学外の友人を中心につきあう」と答えるのが4割前後にのぼる。

この友人関係の傾向を顕著に作り出しているのが，学内のクラブ・サークル活動への参加の度合である（図5）。上越教育大学では，54%の学生が「とても力を入れている」と答えている

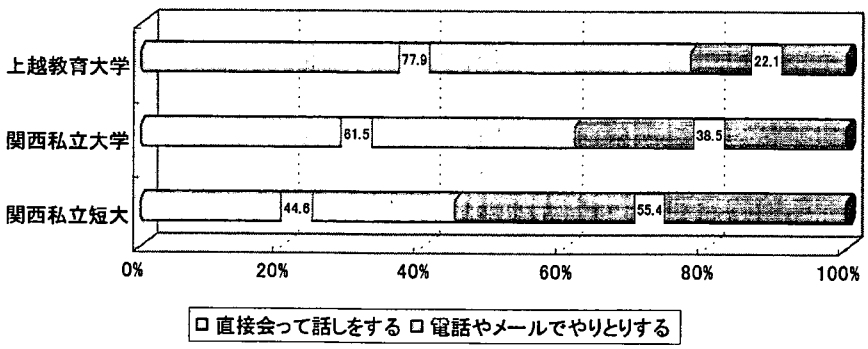

図4　友人とのつきあい方

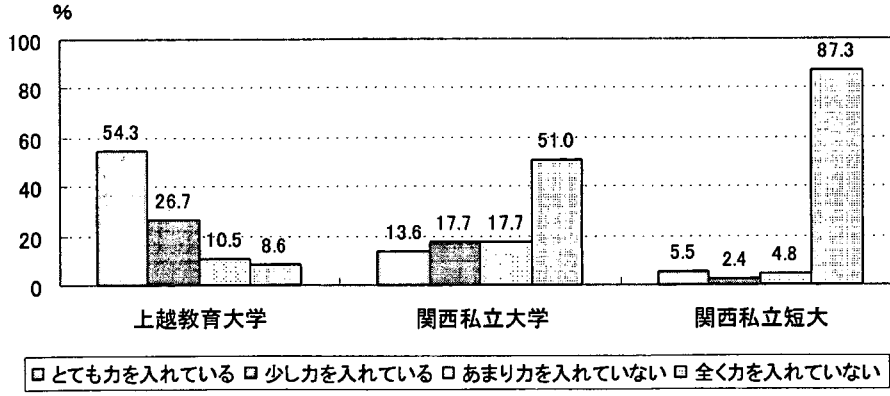

図5 学内のクラブ・サークル活動への参加

のに対し，関西私立大学では51%，関西私立短大では87%[1]の学生が「全く力を入れていない」と答えている点で対照的であり，上越教育大学生は学内の課外活動を中心とする友人関係を築いている。別の質問で，コンパ・飲み会・パーティーに参加する程度を質問しているが，この結果においても上越教育大学生の頻度が高く，67%の学生が月1回以上（うち34%が月2回以上）参加していると答えているのに対し，その比率は関西私立大学で24%，関西私立短大で33%にすぎず，4割前後の学生が「ほとんど参加しない」と答えている。関西私立大学・短大の学生はむしろ，個人的な余暇活動，学外のクラブ・サークル，アルバイトなどに力を入れる傾向が強く，学内に限定されない個人的な友人関係を持っていることが多い。

これらの結果をまとめると，上越教育大学では，学生の出身は広い地方に分散しているが，入学後は大学近辺の寮やアパートに居住して，学内のクラブ・サークルを中心とする友人との緊密なつきあいをする傾向がある。言い換えれば，地方出身で比較的良い成績をあげた者が入試選抜され，入学生たちが親元を離れて集団生活を送ることで，新たな人間形成が図られる文化習得様式を見出すことができる[2]。他方，関西私立大学・短大では，大都市周辺の比較的限られた地域から自宅通学する学生が集まっているが，学内で集団生活を送る傾向は強くなく，学内外を問わず，各人の関心や趣味などに応じて友人関係を作り出していく，個人主義的な私事化傾向をもつ文化習得様式が支配的である。このように地方国立大学と大都市私立大学・短大の間で，対照的な文化習得様式が観察される。上越教育大学は，寮生活をする学生が多いという独自性はあるが，奨学金などの社会的援助の受給率の高さ(35%)，過去の学習経験の少なさ（初等中等教育時に塾・予備校・家庭教師の経験なし29%，家族から日常的に勉強を教えてもらった経験なし50%）などを勘案すれば，教育の機会均等面での役割を果たしている点で，地方国立大学としての多少とも一般的な特性を示しているものと考える。

4．大プレート型と小プレート型のライフスタイル

以上のような各大学・短大によって異なる文化習得様式が，実際に学生の文化実践や価値意識にどのように反映されるのだろうか。表2・3は，文化活動とスポーツ（それぞれ20項目）を行う程度について得点化した平均値を表したものである。文化活動は，「実際に活動を行って

いる」5点,「観客として見に行く」4点,「CD・ビデオ・本を通じて」3点,「テレビや雑誌を通じて」2点,「興味はあるが何もしない」1点,「興味がない」0点として得点化した。スポーツについては,「日常的に行っている」5点,「週1～2回程度行っている」4点,「月1～2回程度行っている」3点,「それより少ない程度」2点,「興味はあるが何もしない」1点,「興味がない」0点となっている。表には,それぞれの文化活動・スポーツについて,3大学・短大のうち最も得点が高かったものに網掛けをしている。

文化活動についてみると,いずれの大学・短大とも,映画,日本のポップス・ロック,アニメ・マンガ,海外のポップス・ロックに接している程度が高い(平均得点はすべて2点以上で全体に網掛けをしている)。加えて上越教育大学では,クラシック音楽,文芸,合唱・コーラス,海外の演劇・ミュージカルなどの得点が相対的に高い。これは主にクラブ・サークル活動を通じて行うためであると考えられるが,「正統的文化」とみなされる西洋趣味や古典趣味に対する関心が,大都市部よりも地方国立大学の学生のほうで高まることは興味深い。学内の集団生活

表2　文化活動を行う程度(得点の平均値)

	上越教育大学	関西私立大学	関西私立短大
映画	3.22	3.44	3.49
日本のポップス・ロック	2.86	2.69	2.51
アニメ・マンガ	2.34	2.49	2.36
海外のポップス・ロック	2.27	2.05	2.00
クラシック音楽	2.16	1.21	1.08
文芸(小説・詩歌など)	2.04	1.71	1.22
合唱・コーラス	1.69	0.77	0.61
現代美術・絵画・版画	1.31	1.43	0.93
日本の演劇・ミュージカル	1.18	1.10	1.19
海外の演劇・ミュージカル	1.05	0.79	0.82
茶道・華道・書道	1.00	0.83	0.98
日本画・日本の陶芸や彫刻	0.93	0.93	0.45
ストリートダンス	0.86	0.91	1.24
日本の民謡・伝統音楽	0.86	0.56	0.68
ジャズ・フュージョン	0.80	0.99	0.69
世界の民族・伝統音楽	0.79	0.75	0.45
グラフィック・デザイン	0.71	1.11	0.65
モダン・ジャズダンス	0.58	0.47	0.53
日本の演歌	0.56	0.47	0.41
日本舞踊・能・狂言	0.56	0.51	0.33

を重んじる人間形成のあり方が，西洋文化のキャッチアップ型の文化習得に結びついているのを看取することができる。

それに対して，関西私立大学では，現代美術・絵画・版画，ジャズ・フュージョン，グラフィック・デザインなど，モダンで個性的な文化・芸術に接する程度が高い。関西私立短大になると，日本の演劇・ミュージカル，ストリートダンス，そして映画に触れている学生が多い。いずれも学内のクラブ・サークルだけでなく，大都市文化圏の様々な施設やイベントを通じた文化接触が行われているものと考えられる。それは集団的に行われるよりはむしろ，個人的な興味・関心に基づいて接する傾向が強いのではないかと予想される。

続いてスポーツを行う程度をみても，上越教育大学では，主にクラブ・サークル活動を通じて競技スポーツが盛んに行われているのに加えて，立地の関係上，アウトドアやウィンタースポーツに接している者が多いことに特色がある。関西私立大学では，男性の比率が高いこともあって，野球，フットサル，ゴルフを行う程度が相対的に最も高い。関西私立短大においては，

表3　スポーツを行う程度（得点の平均値）

	上越教育大学	関西私立大学	関西私立短大
スキー	1.30	0.81	0.84
バスケットボール	1.28	0.97	0.84
バレーボール	1.24	1.02	0.94
サイクリング	1.17	0.88	0.79
水泳	1.16	0.73	0.87
サッカー	1.11	1.06	0.67
テニス（硬式・軟式）	1.07	0.96	0.96
ジョギング	1.06	0.95	0.84
スノーボード	0.87	0.71	0.84
武道	0.83	0.52	0.27
野球（硬式・軟式）	0.83	0.88	0.62
スキューバダイビング	0.79	0.60	0.65
ハイキング・キャンプ	0.78	0.68	0.67
体操・縄跳び	0.76	0.54	0.80
フットサル	0.75	0.76	0.39
ソフトボール	0.65	0.59	0.46
登山	0.55	0.48	0.41
フィットネス	0.45	0.50	0.56
サーフィン	0.41	0.37	0.46
ゴルフ	0.29	0.45	0.30

全体的にスポーツはあまり行われていないが，フィットネスやサーフィンなど，おしゃれで若者に流行のスポーツに関心をもつ学生が多いようである。

これらの文化活動とスポーツに関する結果をみても，上越教育大学において，学内の集団的なクラブ・サークル活動を中心とする文化習得様式のインパクトの強さを窺い知ることができる。それは学校的な規範の影響下で「正統的」な西洋趣味や古典趣味を志向しており，加えて体育会系的な競技スポーツ，あるいは自然志向的なアウトドアやウィンタースポーツを盛んにする傾向がある。このような大学内の文化的環境の中で，キャンパスの効果としての人間形成機能が作用していると言ってよいであろう。ただしその効果は，学校的な規範から離れた，特に都市若者文化の影響下にある文化活動やスポーツには及ばないようである。

他方，関西私立大学・短大における文化習得様式は，キャンパスが学校的な拘束力をもって文化実践に向かわせるよりは，個々の学生と都市文化を媒介する場としての機能を果たしているように見受けられる。集団主義よりも個人主義を志向し，クラシックよりもモダン，競技的よりも余暇的・自己開放的なものに向かわせる傾向が見られる。関西私立短大においては，さらに現代若者の流行やおしゃれを意識した活動も盛んに行われている。学生たちは，キャンパスライフを通じて都市若者文化とのつながりを持ちながら，それぞれの自己形成を図っていると推察される。

そこで学生の価値意識との関わりに着目してみたい。調査票では，「あなたは，あなた自身の生き方，考え方についてどのように考えていますか」という質問に，表4に挙げた12項目について，そう思うかどうかを答えてもらった。「そう思う」4点，「どちらかといえばそう思う」3点，「どちらかといえばそう思わない」2点，「そう思わない」1点として得点化し，その平均値を各大学・短大ごとに表に記載している。それぞれの項目について，最も得点の高い大学・短大の数字に網掛けをしている。

表4　自分の生き方，考え方についての意識（得点の平均値）

	上越教育大学	関西私立大学	関西私立短大
できるだけ新しいものを取り入れ，どんどん改革していく方だ	2.76	2.68	2.66
経済的に恵まれてなくとも，気ままに楽しく暮らせればよい	2.86	3.05	2.93
妥協を排し，自分の信念はできる限り貫くよう努力する方だ	2.63	2.78	2.74
周囲の人の反感をかうので，人と違ったことはやりたくない	2.28	2.13	2.19
友達との争いごとは，できるだけ避けるようにしている	3.13	3.06	2.90
リーダーになって苦労するよりは，人に従っている方が楽だ	2.56	2.51	2.28
先生と学生，先輩と後輩などの上下のけじめをつけるのは大切なことだ	2.91	3.00	2.96
男性は外で働き，女性は家庭を守る方がよい	1.46	1.73	1.68
自分の願望にできるだけ忠実に生きたい	3.04	3.25	3.29
自分には多くのよい点があると思う	2.38	2.33	2.40
ファッションセンスにいつも気を配っている	2.56	2.47	2.70
ブランド商品の流行に敏感なほうだ	1.74	1.63	1.92

結果をみると，上越教育大学では，「できるだけ新しいものを取り入れ，どんどん改革していく方だ」と答える比率が高く，逆に「男性は外で働き，女性は家庭を守る方がよい」には「そう思わない」と答える傾向が強く，旧弊にとらわれない進歩的な意識をもつ学生が多い。他方で，「周囲の人の反感をかうので，人と違ったことはやりたくない」「友達との争いごとは，できるだけ避けるようにしている」「リーダーになって苦労するよりは，人に従っている方が楽だ」と答える傾向も高く（反対に「妥協を排し，自分の信念はできる限り貫くよう努力する方だ」「自分の願望にできるだけ忠実に生きたい」の比率は相対的に低い），自己主張を控えて周囲と協調しながら行動するのをよしとする考え方が強い。これはおそらく学内の寮やクラブ・サークルを通じた集団生活を送る学生が多いことと関係しているのであろう。実際，調査票の自由記述欄には，仲間と一緒に協力して物事を成し遂げていくことのすばらしさを書く学生がいる一方で，人間関係の難しさを指摘する記述も見られる。

関西私立大学においては，「経済的に恵まれてなくとも，気ままに楽しく暮らせばよい」「妥協を排し，自分の信念はできる限り貫くよう努力する方だ」と答える比率が高く，反対に「周囲の人の反感をかうので，人と違ったことはやりたくない」には「そう思わない」と答える傾向があり，自分の個性や生き方を尊重する個人主義的な考えをもつ学生が多い。他方で，男性の比率が高いこととも関係して，「先生と学生，先輩と後輩などの上下のけじめをつけるのは大切なことだ」「男性は外で働き，女性は家庭を守る方がよい」と答える比率も相対的に高く，慣習的な規範を重んじる傾向も見られる。

関西私立短大の学生は，より自己実現的な価値観をもつ傾向が強く，「自分の願望にできるだけ忠実に生きたい」「自分には多くのよい点があると思う」と答える比率が高い。逆に「友達との争いごとは，できるだけ避けるようにしている」「リーダーになって苦労するよりは，人に従っている方が楽だ」と答える比率は相対的に低く，人間関係の困難を越えて人の先頭に立とうとする意識も強い。また，全員が女性であることもあり，「ファッションセンスにいつも気を配っている」「ブランド商品の流行に敏感なほうだ」の比率も高いが，これも短大生の自己実現志向に結びついていると言えるかもしれない。調査票の自由記述欄には，将来の夢と目標に向かって明るく張りつめた生活の様子が書かれている一方，人同士のつき合いの難しさや，グループに分かれる友人関係を指摘する記述もあった。

以上のような学生の価値意識と関係づけてみた場合，串崎(2002)の指摘する「大プレート型」と「小プレート型」のライフスタイルという区分を用いると理解の助けになる（図6）。この概念自体は，現代の学生が無気力に見える潜在的な原因を，多様化するライフスタイルの時代変化に求めるために考案されたものである。高度経済成長期に学校(そして会社)という大プレートに乗って自己形成を図っていったライフスタイルが大きく崩れはじめ，授業，サークル，アルバイト，ボランティア，ショッピング，デートなど，多元的に分化した小プレートに帰属意識とリアリティを抱くようになった。1985年頃からそのような変化が起こりはじめ，1990年代以降の学生には複数の小プレートに乗り，渡っていくライフスタイルが定着するようになった。現代の学生が無気力に見えるのは，プレートによって異なる人間関係を使い分け，人一倍気遣いをする中で，「問いの結果として立ち止まった状態」の表れであるとされる。

しかし，本稿でみた上越教育大学における学内の集団生活を中心とする学生生活は，むしろ大プレート型のライフスタイルに近いものであろう。今の学生たちが，全体として小プレート型のライフスタイルに対応した心的態度を身につけているとしても，特に地方国立大学におい

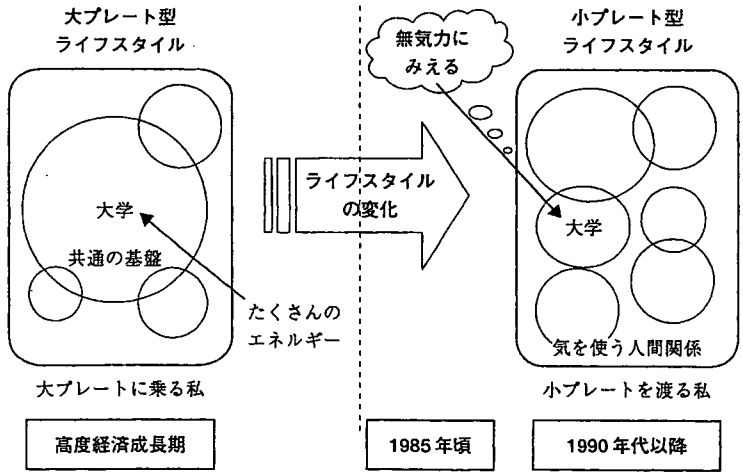

図6　学生ライフスタイルの変化（串崎，2002，p79より引用）

ては，実際の学生生活において大プレート型が依然健在であり，そのスタイルに沿った文化習得様式が見られるのも確かである。ここでは時代変化の問題として位置づけるよりは，地方国立大学と大都市私立大学・短大との対比の中で，2つのライフスタイルの区分を援用することにしたい。

関西私立大学においては，小プレート型のライフスタイルが支配的であると考えてよいであろう。授業やクラブ・サークル活動だけでなく，個人的な余暇活動やアルバイトなどを通じて学内外に幅広い友人関係をもち，大都市文化圏の様々な若者の流行に触れ合っている。学校が終われば自宅で過ごす学生が多いことから，家族や近隣との交流も日常的に行われていると推察される。学生の意識においては，周囲に安易に押し流されるのではなく，自分自身の生き方や考え方を尊重し，自分の興味関心にしたがって行動を選択する態度が顕著である。それだけに，人間関係に気を遣ったり，不安や戸惑いを感じたりすることもあるのではないだろうか。ただし，関西私立短大では，モラトリアムの中で思い悩むというよりは，将来の夢や目標に向かって2年間の多忙な生活をこなし前進しようとする意識が見られ，リーダーとして先頭に立つ考えなど，自己に対してポジティブな態度を示す学生が多いように思われる。

5．「必要性への距離」の今日的課題

さて，これまでの調査結果の分析で見出された各大学・短大に特有の文化習得様式から，今日におけるキャンパスの人間形成機能として，どのような問題点と課題を導き出すことができるだろうか。たとえどれほどマス・ユニバーサル化が進んだとしても，大学教育がもっぱら職業専門的な必要性のみに従属することはあり得ないであろう。むしろ，P．ブルデュー(1979＝1989，p83)の言う「必要性への距離」を保つことが，とりわけ人間形成面において幅広い教養と豊かな人間性を涵養するための大学教育の条件になるのではないかと考える[3]。

「必要性への距離」とは，文化面において，「ある作品を『その内容とは関係なく』評価しようとする傾向，…そしてより一般的には正統的作品が要求するこうした『無償』で『無私』の

自己投入の傾向」(前掲書，p.83)を生み出すものであると説明される。それはまた，「経済的必要性の外側へいわば隠遁するという代償を払わなければ獲得できない」(p.83)ような条件を要する。「必要性への距離」が得られることによって，たとえば「ワインなどの製造年代やチーズの選択，田舎の別荘の室内装飾といった，ありとあらゆる慣習行動を方向づけ組織だててゆく一貫した方針の産物」(p.87)となって「生活の様式化」がもたらされ，日常的利害や差し迫った必要に支配されては得られない「自由趣味」に根ざした文化的卓越化を作り出す効果を持つにいたることになる。

当然ここでは1960～70年代フランスの「正統的文化」を問題にしているのではない。今日のグローバル時代において，特定の国における文化を唯一のモデルに置くこと自体，ほとんど意味をなさないであろう。そうではなく重要なことは，「必要性への距離」が持つ文化習得面の効果について，その今日的な意義と課題を考えることである。それはもはや上流階級（が存在するとして）やエリート層に決して専有されるようなものではないと筆者は考える。

近年の高等教育の構造変容に伴って，大学の「学校化」が進行しているという指摘がなされている(市川，2003，田中，2002)。全体としての大学理念が喪失している中で，大学の教育機能は，中等教育や情報産業と明確に区別をつけがたくなって，知識・情報・スキルの伝達に矮小化するとともに，学生は「生徒化」し，教授は「教諭化」していく傾向が見られる。1990年代以降急速に進行したカリキュラム改革は，図らずもそのような方向を加速させている危険性がある。すでに1980年代から「学生消費者の時代」(喜多村，1986）と言われた問題状況の変化において，いま一度「必要性への距離」という観点から，キャンパスでの学生生活を通じた従来型の文化習得様式を見直し，その相続継承によって人間形成機能の回復を図る方途を探ることが課題として導かれることになる。

本稿において上越教育大学と関西私立大学・短大で見出された文化習得様式は，現代のマス化状況の下にありながらも，それぞれの設置主体，地域性，学生生活条件などの特性に応じたキャンパス文化を形成する礎になるものをもっている。学内の集団生活を重視する大プレート型であれ，学生個人の多元的な文化実践が連鎖しあう小プレート型であれ，そこから「必要性への距離」の効果を引き出せるキャンパスライフを構成することができれば，それぞれ違ったタイプの個性を発揮させる人間形成機能が得られることにつながるであろう。逆に言えば，各大学・短大に特徴的な文化習得様式の土壌を省みることなく，それに適合しない教育改革をいくら施したとしても，上辺だけで定着しないまま終わる結果になりかねない[4]。

中山(2003)が大学生向けにわかりやすく述べているように，「自分の内部から発する内発的な問いと答え，それを友人どうしで議論する空間」としての，大学の「知的空間」の中に時間をかけて身を置くことの重要性は変わらない。その自発的・内発的な問いは，大学の中でも外でも，親元の中でも外でも，国の中でも外でも見つけ，発することができる。また，授業などを通じて得られる学問の公的な知識に基づくものでも，読書・文化活動・スポーツなどを通じて教養として得られる私的な知識に基づくものでもよいし，さらには専門性や実用性に根ざした「実学」についてでも，自己充足的で周りの役に立たない「虚学」（そこには受験勉強も含まれる）についてであってもよい。要は，そのような問いを自ら発し，議論することによって，学生たちが自己形成を図ることのできる空間を，今日の大学がどれだけ提供できるかどうかにかかっていると考える。

注

[1]関西私立短大は，2年間の教育課程であることから，時間的にも内容的にも密度の高いカリキュラムが組まれ，学生生活も授業の比重が高くなるために，クラブ・サークル活動が盛んに行われないという事情がある。実際，調査票の自由記述欄には，保育士や教師になる夢をかなえるという目的意識をもちながら，忙しい学業生活をこなす様子を記したものが見られる。

[2]これをE.ゴッフマンの言う全制的施設(total institution)と呼ぶには大きくかけ離れているが，その擬似的な外観が地方国立大学で残っているのは興味深いかもしれない。全制的施設とは，「同じ境遇にある多数の個々人の日常生活のすべてを俗界から隔離し，それを厳格に管理する閉鎖的な全面的収容施設」(濱嶋朗他編，『社会学小辞典』，有斐閣)を意味し，教育においてはフランスのグランドゼコール（準備級）の寄宿制度(Bourdieu, 1989)や，戦前日本の全寮制の旧制高校（竹内，2003）などに適用されることが多い。それとは異なり上越教育大学は，外界から決して隔離されていないこと，現職派遣教員との異年齢交流があること，禁欲的な勉学中心のエリート教育でないこと，男女共学で女性の人数のほうが多いことなどが特色として挙げられる。

[3]もっとも「必要性への距離」という観点を，ブルデューが社会学的な意味において導入した最初の目的は，フランスの上流階級の家庭で相続継承される「文化資本」を通じて，目に見えにくい形で階級再生産が企てられる過程を明るみに出すことにあった。すなわち，社会的には支配的な位置にあるエリート層の問題に適用されるものであった。しかし，小澤(2004)が指摘するように，ブルデュー自身，晩年の1990年代になると，市場主義的なネオ・リベラリズム改革から文化の自律性を守り，真の教育の民主化を図るために，「合理的教育学」という立場から万人に「文化資本」へのアクセスを保障する必要性を主張するに至っている。

[4]市場主義に基づくネオ・リベラリズム教育改革がもつ問題点の一つは，大学界をはじめとする文化的な自律性を考慮に入れないところにあり，一つ一つの改革をその総体から見た場合に，様々な意図せざる構造的矛盾を抱え込む危険性をはらんでいる（アレゼール日本編，2003)。

附　　記

小論は，2003-2005年度文部科学省科学研究費補助金（若手研究B）による研究成果の一部である。調査実施にご協力いただいた各大学・短大の先生方，および学生の皆様にお礼を申し上げます。

文　　献

天野郁夫，1999，『大学―挑戦の時代』，東京大学出版会.

天野郁夫，2002，「異質の『空間・時間・関係』」，『IDE 現代の高等教育』2002年4月号，pp.65-66.

アレゼール日本編，2003，『大学界改造要綱』，藤原書店.

Bourdieu, P., 1979, *La distinction : Critique sociale du jugement,* Minuit.＝1989，石井洋二郎訳，『ディスタンクシオン―社会的判断力批判Ⅰ』，新評論.

Bourdieu, P., 1989, *La noblesse d'État*, Minuit.

市川昭午，2003，「高等教育システムの変貌」，『高等教育研究』第6集，pp. 7-25.
喜多村和之，1986，『学生消費者の時代―アメリカの大学「生き残り」戦略』，リクルート.
高等教育研究会編，2002，『大学審議会全28答申・報告集』，ぎょうせい.
串崎真志，2002，「学生生活と無気力論」，溝上慎一編，『大学生論―戦後大学生論の系譜をふまえて』，ナカニシヤ出版，pp. 67-84.
溝上慎一，2004，『現代大学生論―ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる』，NHKブックス.
中山茂，2003，『大学生になるきみへ―知的空間入門』，岩波ジュニア新書
小澤浩明，2004，「P. ブルデューの合理的教育学の再評価―ネオ・リベラリズム批判の視点から」，『日仏教育学会年報』第10号，pp. 89-99.
武内清編，1999，『学生文化の実態，機能に関する実証的研究』，平成8～10年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書.
武内清編，2003，『キャンパスライフの今』，玉川大学出版部.
竹内洋，2003，『教養主義の没落―変わりゆくエリート学生文化』，中公新書
田中毎実，2002，「大学の学校化―大学教育改革の行方と教育理論」，『教育学年報』第9号，pp.95-112.
山内乾史，1993，「カレッジ・インパクト研究の批判的検討」，『大阪大学教育社会学・教育計画論研究集録』第9号，pp. 15-32.

Current Student Life from the Viewpoint of the Function of Human Development

—— Comparison of Joetsu University of Education and Private University and Junior College of Kansai District ——

Atsumi OMAE*

ABSTRACT

In this paper, we intended to analyze the characteristics of modes of acquisition of culture through the student life as it is today, according to the survey results of Joetsu University of Education (national and local) and private university and junior college of Kansai district. We are concerned with the function of human development which has been damaged by the mass and universal access of university.

In Joetsu University of Education, there exist the "grand plate type" of campus life in which most of students participate in extracurricular activities in the university. On the other hand, in private university and junior college in a big city, many students take part in various small group activities both inside and outside the campus according their interests, so that we called it "small plates type". The question is to reconsider the importance of "distance from necessity" in current lifestyle of students.

* Division of School Guidance and School Administration